

社会人のための情報システム誌
— 経営近代化のシステム研究 —

Computer Report

8

2013 No.707

3 はじめの言葉

4 なぜ日本は情報戦に疎いのか

どこを見直すべきか

田原文夫

スマホは電話というより、情報機器だと言える。携帯電話をインターネット接続することまでは日本のベンダーも追随していたが、そこで止まってしまった。スマホという存在にしても、本来的にはコンピュータメーカーという最も情報戦略に近い所に居ながら、その本質を見抜けていなかった。これが国産コンピュータメーカー凋落悲劇の始まりである。従前のビジネスでの達成感、自惚れからなのか、一定レベルでの技術的成功で満足したのか。日本企業がスマホに出遅れた理由が、ここにある。日本企業の最大の弱点は、情報に対して不感症なところだ。日本産業に限ったことではない。国家/日本政府としても、非常に情報処理に疎い。この国レベルでの情報に対する疎さが、今日の周辺諸国との関わりや、日本産業全体にも様々な悪影響を及ぼし、その結果が、ひとつ一つ表面化してきている。情報システムに直接的な関わりを持ちながら、やはり情報に疎かった情報システム部門の存在も、昨今の日本産業全体の現状に大きく影響している。忘れてはならないことだ。これまでの我が国の情報処理への取り組みを総括してみよう。

1 1 情報社会を考える その35

情報社会作りに、どう関与し、どう貢献していくか

編集部

アメリカ政府が見せた SNS サービスの闇

恐ろしいほど、アメリカ政府による SNS ベースの盗聴問題が取り沙汰されなくなってしまっている。アメリカ政府がもとより、国を挙げて展開してきている国家セキュリティ対策の一環だということで、マスコミを含めて、周囲が気遣いをしているのだろうか。いずれにせよ、9.11 テロを再発させたくないというのは、アメリカ国内の一致した意見には相違ないだろう。

彼我のセキュリティ対策状況を、単純に比べてみても意味はないだろうが、日本の国を挙げてのセキュリティ対策についての基本ポリシーもなければ、コアになるコンセンサすら取れていないというのが実状だろう。それどころか、国の機関だけでなく、地方自治体や公共団体、あるいは大小の企業が、安直に各種の SNS および検索サービスを活用してきている様をみると、絶望的になりそうだ。

何故なら、それらの大手サービスは、ほとんどすべてアメリカベンダーによるものであり、アメリカ政府による情報収集に利用されていることが判明しているものばかりだからだ。

1 3 日本再生／世界競争力回復のカギ

何故 M-BIM 構築が必要か その 30

水田 浩

まちづくりの BIM:コンパクトシティ

町づくり仕様標準条例 (Form-Based Codes、FBC)

FBC の作り方

先月号でのコミュニティの評価を助けるための従来と異なる FBC のゾーニングを次の 3 ステップで実現する。

ステップ 1 コミュニティの考える地域を定義する。

ステップ 2 その地域に関する既存の条件を評価する

ステップ 3 コミュニティのビジョン、実現のための仕様標準条例、FBC 実施手順を作成する。

1 8 連載 アーキテクチャ論 (28)

高保証アーキテクチャ標準 O-DA

山本修一郎

2013 年 7 月 15 日にフィラデルフィアで開催されたオープングループ会議で日本から我々が提案した Open Dependability Through Assuredness (O-DA) が標準化された。本稿では、この O-DA 標準の概要について紹介する。はじめに、O-DA の内容構成について説明し、次いで、TOGAF V9.1 に基づく高保証アーキテクチャ開発手法 (Assured Architecture Development Method) について紹介する。

2 7 国家レベルのセキュリティ論とそれに呼応する対応策(3)

aism

現政権の打ち出した「日本版 NSC (国家安全保障会議)」設置がいつ頃になるのか、今のところ定かではない。しかしこれまで、①企業等組織におけるセキュリティ担当者の存在とこれからのミッション、②企業等組織にとってのセキュリティ対策の見直しとあり方、③社会的存在としての企業等組織のセキュリティ対策を追求してきた立場からすると、実に様々な困難に突き当たっている。困難というより限界にぶち当たっていると言うほうが正確かもしれない。それつけても、我が国のこれまでのセキュリティ対策周辺には、キリがないほどのリスクが充満してきているようだ。国家レベルでのセキュリティ論どころか、これまでに、あまりにも無防備な対応が蓄積されてきたことから、随所に深刻な状態が充満してきている。国／地方、企業、個人と幅広い活用が進んでいるネット上の検索エンジン／SNS の存在を、どのように総括し、あるべき姿へ収束収斂させていくべきか。日本の国家レベルセキュリティの確保は、どこから着手されるべきか。

3 1 ものの造れる日本再生に向けて その 23

第二／第三の創業へ

Dr.ベスト

1970 年代のオイルショック後の 1980 年代は「激動の時代」と予測されたが、実は、「ジャパンアズ No1=No1 としてのニッポン」という、今にして思えば黄金期だった。その黄金の夢が一気に醒めたのが、1991 年のバブル崩壊という悪夢からの出発だった。そして

それは、さらに厳しい姿勢で日本全体の産業界のリストラクチャリングに挑戦する時代の幕開きだった。まさに温故知新である。新興国にはない一企業の枠を超えたリストラクチャリングの歴史をひもといてみよう。鉄鋼、造船、エンジニアリング、自動車、電気・電子業界の動向を追いながら、これからの日本再生に向けて踏み込んだ展望をしてみたい。

3 6 IT 新時代とパラダイム・シフト

第 4 6 回 官庁の内部情報の公開放置問題を

グローバルな視点から捉えると

根本 忠明

読売新聞は、中央官庁などの内部メールが公開状態に放置されていた問題をスクープした。政府は情報セキュリティ対策推進会議を開き、再発防止を指示したが、これで一件落着といえる単純な問題ではない。この問題をグローバルな視点から見ると、日本社会における ICT 対応の遅れが見えてくる。日本政府や企業のユビキタス社会に適合した早急な対応が、問題解決の一番の近道といってよい。

3 9 続インテリジェンスへのいざない 43

ビッグデータ分析に絡む困った脅威の存在

今井 武

実に誠にお粗末な事件が発生した。JR と日立という我が国を代表するビッグカンパニーが、流行りのビッグデータ分析のための情報売買で信じがたいビッグフォールト（大チョンボ）を犯した。情報の何たるかを知っているようで、知っていないことを証明して見せた。

4 2 一味違うウェブ検索

第三十七話 統計数字に注意する④

国内外のメディアで Abenomics をチェック

ぐうのうえぶへい

参議院選挙で自民党が圧勝した。この勝利は、安倍首相の成長戦略アベノミクスによるが、その実現性を疑問視する国内専門家は多い。経済の門外漢にとっては、アベノミクスをどのように理解しどう評価すべきか、よくわからない。将来のことであり、専門家を含め誰にも正しい予測は困難な問題であるが、国内メディアの取り上げ方には、偏りがあるように思われる。このような場合、海外の見方や評価に耳を傾けるのも一つの方法である。今回は、内外の主要メディアや経済専門家による「Abenomics」の情報入手の具体的な方法について紹介しよう。

4 4 連載 四字熟語カトレーニング

すぎやまちヒロ

セミナー／講演会の講師紹介

ユーザー会/各種研究会/勉強会における
セミナー/講演会での講師をご紹介します。

クラウドサービス導入前のチェックポイント

クラウドサービスは果たしてTCO削減に寄与するか

レガシーマイグレーションの進め方と留意点

これからの企業情報システム構築のポイント

これからの金融情報システムの課題

役に立つ情報管理の実践と課題

情報セキュリティ監査の受け方／臨み方

リポジトリベースのシステム資源管理

その他 クラウドサービス導入にお悩みの方

など 各種コンサルティングも承ります

ご質問／何でも相談は下記まで
株式会社 日本経営科学研究所
ComputerReport編集部

cr-info@jmsi.co.jp

CR 選書のご案内

CR選書

改訂版
データ・ウェアハウス

定価 本体 2,816円+税 送料(〒300) A5版 289頁 石井義興 著 (株) 日本経営科学研究所 発行

目次

第一章 目録が必要としているデータ	第七章 情報システム部門しかできないデータ・ウェアハウスのサポート
第二章 データベースとデータ・ウェアハウスの構造	第八章 データ・ウェアハウスの構築とデータ移行ツール
第三章 OLAP用のデータ・ウェアハウス	第九章 データ・ウェアハウスの利用とエンドユーザーツール
第四章 リレーショナル・モデルとネストド・リレーショナル・モデル	第十章 データ・ウェアハウスの保守とオートメーション
第五章 正規化の問題点とデータ・ウェアハウス	
第六章 データ・ウェアハウス管理システム	付録

お申し込み/お問い合わせは cr-sale@jmsi.co.jp

実践データ・ウェアハウス OLAP

定価 本体 3,000円+税 送料(〒300) A5版 249頁 豊島一政・木村 哲 共著 (株) 日本経営科学研究所 発行

目次

第一章 これまでのEUCIでできなかったこと	第七章 多次元データベースを作る
第二章 OLAPの定義	第八章 多次元データベースの構造
第三章 Code博士によるOLAPプログラムの評価ツール	第九章 多次元データベースとアプリケーション
第四章 分析処理の歴史	第十章 OLAP/サーバーとフロントエンド
第五章 OLAP(多次元データベース)の形	第十一章 OLAPアプリケーションパッケージ
第六章 データウェアハウスとOLAP	付録

お申し込み/お問い合わせは cr-sale@jmsi.co.jp

CR選書

消費者行動論

定価 本体 3,000円+税 送料(〒300) A4版 181頁 田原文夫 著 (株) 日本経営科学研究所 発行

目次

第一章 消費者行動論	第四章 消費者意志決定
第二章 消費者行動と心理的決定要素	第五章 消費者行動トピックス
第三章 消費者行動と社会的決定要素	第六章 人間であること(人間行動トピックス)

お申し込み/お問い合わせは cr-sale@jmsi.co.jp

aism 研究活動報告
インターネットセキュリティの落とし穴

定価 本体 3,000円+税 送料(〒300) A4版 197頁 一橋大学教授 安田 聖 監修 aism情報セキュリティ・マシントリニティ研究会 著 (株) 日本経営科学研究所 発行

目次

第一章 落とし穴を回避するための基礎テクノロジー	第十一章 WORM、KLEZの監視と駆除
第二章 aism情報セキュリティマシントリニティ研究会の発足	第十二章 メールが通らない
第三章 匿名化された電子署名方式の基本原則	第十三章 生体認証のための情報オーナーの課題
第四章 世界を駆けめぐったCodeRedワーム	第十四章 最近のインターネット防衛戦線心得
第五章 aismの2012年度の事業計画	第十五章 ITガバナンスの意識と情報セキュリティ対策
第六章 情報セキュリティ対策	第十六章 情報セキュリティ対策とセキュリティ教育
第七章 VPN(バーチャルプライベートネットワーク)	第十七章 ケーススタディ「情報セキュリティ教育」
第八章 aismの2013年度の事業計画	第十八章 セキュリティポリシー作成にあたってのノウハウ
第九章 情報セキュリティ情報研究会の発足と課題	
第十章 インターネット関連の苦情と不正アクセス	

お申し込み/お問い合わせは cr-sale@jmsi.co.jp

CR選書

エンタープライズ情報システム設計の基本書！
トップ主導の情報システム革新

定価 本体 3,000円+税 送料(〒300) A4版 271頁 高田 顯重 著 (株) 日本経営科学研究所 発行

目次

第一章 情報システム利用環境の変遷と今日的課題	第五章 情報システム監査
第二章 経営活動と情報システム	第六章 情報システム部門の体制革新
第三章 経営情報システム革新の方向	第七章 情報システムの成果評価
第四章 トップ主導の情報システム開発	第八章 変化対応のシステム作り

お申し込み/お問い合わせは cr-sale@jmsi.co.jp

計量モデルの構造と解法
—オーダーリングとスパース—

定価 本体 3,000円+税 送料(〒300) A4版 213頁 安田 聖 著 (株) 日本経営科学研究所 発行

目次

第一部 計量モデル	第二部 大規模モデルの効率的解法
第一章 計量モデルと計量モデルの解法と歴史	第五章 計量モデルの分解方法
第二章 線形計量モデルの解法	第六章 方型式のオーダーリング
第三章 非線形計量モデルの解法	第七章 大規模モデルの解法
第四章 反復法の問題点	第八章 スパース
付録・電子計算機の高速化と計量方法	

お申し込み/お問い合わせは cr-sale@jmsi.co.jp

CR選書

『いざ！というときの得広報』
すぐに役立つ実践117カ条

定価 本体 1,748円+税 送料(〒300) A5版 228頁 加藤洋一 著 (株) 日本経営科学研究所 発行

目次

■ 広報ビジネスの前提条件	■ 売れない企業体質
■ ニュースリリースは東方向選定	■ 守るも攻めるも広報が窓口
■ 活字媒体の特性をチェックする	■ あなたならどう対応する「事例編」
■ 記事の材料(ネタ)と発表のテクニック	<付> 記事とうまく付き合うための鉄則(まとめ)

お申し込み/お問い合わせは cr-sale@jmsi.co.jp

ザ・ワールドリンク
がんばれ、国際グローバルサーバー—
IBM社に挑んだ国際情報システム作りの物語

定価 本体 1,848円+税 送料(〒300) A5版 268頁 迫 忠幸・湯浅 誠 共著 (株) 日本経営科学研究所 発行

目次

第一章 発端	第十一章 日本開港法の謎
第二章 あるプロジェクト	第十二章 米軍チーム撤退の危機
第三章 新しいシステムへの働き	第十三章 新たなチーム
第四章 WOOIに向けて	第十四章 米軍撤退所帯と新たな組み
第五章 FJO、IBM戦争	第十五章 開港場建設とバレンタイン
第六章 日本プロジェクトチームの発足	第十六章 ユーザー教育
第七章 プロジェクト開始	第十七章 日本運用体制と本番後日誌
第八章 米軍チーム立ち上りの流れ	第十八章 既存システムとのデータ交換の問題
第九章 大きな壁、英語コミュニケーション	第十九章 稼働時の一 直前、稼働、直後の苦しみ
第十章 米軍チーム、異なる三人組	第二十章 稼働時の二 安眠薬と北米センター移設

お申し込み/お問い合わせは cr-sale@jmsi.co.jp